書評

イルメラ・日地谷・キルシュネライト著『日本人が残したもの——越境文化、翻訳、自己主張』

Irmela Hijiya-Kirschnereit. *Was vom Japaner übrig blieb: Transkultur, Übersetzung, Selbstbehauptung*. München: Iudicium Verlag, 2013

土屋勝彦

本書は、ドイツ語圏日本学研究の碩学でありベルリン自由大学日本学教授である著者が一九九〇年から二〇〇七年にかけて発表した十五編の論文集であり、主題別に四章から構成されている。

第一章は、日本文学の翻訳可能性、日本と西洋における俳句理解の差異、日本文学の受容、日本におけるロゴフレーズの英語表記という翻訳をめぐる四つの主題を論じている。日本文学の翻訳不可能性についてはよく言及されるが、逆にヨーロッパ諸言語より距離が遠いゆえに自由翻訳の可能性が高まる側面もあるという。日本語表現の多義性や曖昧性を翻訳する際の困難さが例証されるが、文脈を正当に解釈すれば相対的に翻訳可能だという立場が示される。また昔の大仰なドイツ語翻訳に比べると現代訳の方が非装飾的で厳格になり、より繊細な読者・受容にも対応できるゆえに、日本文学の多様性への感受性がさらに高まることを期待したいという。俳句論では、万葉集から芭蕉を経て良寛、一茶、子規に至る俳句作品を例示しつつ、桑原武夫の「俳句第二芸術論」を紹介したあと、ドイツの俳句受容にも触れ、この文学ジャンルが大衆性と普遍性を持つことを検証している。ドイツでの日本文学受容に関しては、一九八八年から一九九四年の間に刊行された日本関連の翻訳書数が、一八六八年以降百年間の新刊書数を上回っている。一九九三年以後日本文学双書と題して毎年三冊から六冊の翻訳書が刊行され、平安時代から鎌倉時代、明治から平成に至る文学作品、つまり古今和歌集や方丈記にはじまり、荷風、鷗外、

漱石、それに大岡昇平、石牟礼道子、宇野千代、円地文子、河野多恵子、大庭みな子など多種多様な日本文学が紹介され、さらに古井由吉、丸谷才一、島尾敏雄まで翻訳された。このシリーズは著者の責任編集で刊行されたドイツ随一の日本文学翻訳選集であり貴重な仕事である。ドイツでの受容について言えば成功かどうか判断するにはまだ時間がかかるが、たとえば各五千部近くが販売された実績は、一定の受容がなされたと判断できるだろう。書評以外にもラジオドラマや戯曲、オペラ、映画などに作品が引用されたりすることから、日本文学がドイツで徐々に定着してきたといえる。ロゴフレーズに関する論文では、Tシャツなどのロゴ標語がいかなる社会的文化的機能を有するかを考えるために、主に一九八〇年代の英語で書かれたロゴやキャッチフレーズの言語分析を試みている。子供用のトレーナーに書かれた標語が、間違った英語表現を含みつつも、商品とは関係なく明るい気分をアピールしており、無論欧米にも見られるとはいえ、日本ではとりわけ内容よりも装飾性が重視されたイメージ戦略のひとつになっている。キャッチフレーズやスローガン、格言やモットー、ジョークや政治メッセージなど、スポーツからファッションまで様々の具体例を挙げながら分析し、こうした標語が俳句や川柳と同様に、言葉遊びを含む日常生活に根を下ろしていることを検証し、ユーモアとアイロニーを持つ詩的表現でもあると述べている。

第二章では、「人気作家」たる林真理子の「私小説」論、日独文学交流、日本文学におけるベルリン表象、そして本書の表題が副題になっている映画『ロスト・イン・トランスレーション』が解釈される。まず八〇年代にベストセラーとなった林真理子の「私小説」という短編では、リアルな当事者性を演じる作家と主人公の同一性から読者を引き込み、若手作家の成功物語と作家を取り巻く女友達との葛藤・交流が平易な日常語で描かれ、虚構が現実と結合され文学マーケットを形成するというメタ物語の様相が論じられている。日独文学交流では、長年独文学から近代日本への一方的流入と受容が見られたが、現在では吉本ばななや村上春樹などドイツ語圏でのベストセラー日本文学も現れており、それはシュリングの評判作『朗読者』が日本で相当数読まれたのと類似している。ベルリン表象については、大江健三郎から小田実、村上春樹、河野多恵子、三島由紀夫、開高健、そして森鷗外のベルリン表象、とくに移民の多いクロイツベルク地区の描出が論じられ、最後にドイツ作家の日本像も少し触れられている。本章の眼目となる映画『ロスト・イン・トランスレーション』とカズオ・イシグロの『浮世の画家』の比較日本文化論ないし翻訳文化論では、両作品とも日本像を外部からの視線で描出しているにもかかわらず、西洋人にも日本人にも「想像ないし期待された」「真正な」描写として受容される過程が明らかとなり、結論として、こ

うした戸惑いながらも納得するというアンビバレントな他者理解の境地こそ文化翻訳というものの逆説的な面白さだろうという。

第三章では、三島由紀夫作品における終末世界像を考察した文学的風景描写の美学論、愛国的な食通・グルメのプロパガンダ表象を論じた日本国民的な自己主張・自己理解の考察、「忘れられた追憶」と題するファッションやモードから見た国民的アイデンティティ表象の分析が主題である。三島由紀夫の黙示録的な終末風景に慰めを見いだすのは、鴨長明から始まる日本的無常観のみならず、戦災直後の瓦礫の風景が、地震や津波など天災直後の瓦礫風景と同様に、過酷な状況への審美性発見という日本人の宿命論的美学と結びついており、戦争直後の報道写真にもそれが現れているとする。

第四章は、アジアの日本と題して、戦後の過去の克服問題から日本文学における南京表象、そしてアジアにおける日本文化の成立過程が検証されており、とくにアジアのなかの日本文化については、日本におけるグローバル化とその前史を取り上げ、中国由来の漢字導入から明治以降の西洋文化移入の歴史に至る日本文化の影響史を論じ、たんなる外来文化の影響というより異質なものの自己対話ないし自己発見の歴史であり、他者文化への「憎悪・愛」があると指摘する。

以上本書の概要を紹介したが、日本文学研究を中心に据えながら、戦後の歴史問題から、映画、ファッション、モード、グルメなど現代日本のポップカルチャーまでを視野に入れて明解かつ丁寧に紹介・考察していく姿勢は一貫しており、日本人読者にとっても大いに啓発されるだろう。とくに文学翻訳に関して、過度のペシミズムに陥らず、ドイツ人読者に対して可能な限り日本文化のエートスが理解できるよう簡明に説明されている点は高く評価できる。また文学研究のみならず歴史学や社会学からの知見を反映させることで学際的な著作にもなっている。先行研究として日本人研究者のみならず欧米やアジアの研究者も参照・紹介している点でも視野が広がり、著者の行き届いた目配りと多様な関心動向がよく窺える。ただし日本的な美意識に関する分析には説得力があるが、「美しき日本」という表象につながるネガティブな伝統的保守主義についてもさらに掘り下げた分析を望みたい。また想像された自己表象と他者表象の問題が、文化翻訳における重要な課題であるとの認識に異存はないが、これはフロイトを起点としてラカンが言及している鏡像理論とも関わる問題系であり、社会心理学的な方向に広がるように思われる。また多様な日本文化像と受容過程を解明する本書の意図は明確であるが、論集という性格上やや総花的ないし概説的になる部分も散見される。とはいえ本書は、日本的美意識や日本文学の特徴・受容過程について、自文化からの視線では見通し難い諸問題を、優れた観察眼と旺盛な

好奇心によって活写しており、日本文学・文化論として必読文献の一つになるだろう。その意味でも本書の表紙絵は示唆的である。有産階級の芸術収集家とおぼしき日本の老紳士が葉巻をくゆらせながら、ゴッホの絵の前で微笑んでおり、その側には和装の日本女性が「切り取られた耳」の瓶を盆にのせてたたずんでいる。このジャポニズム・エキゾチズム、あるいはポストコロニアリズムとポストモダンを逆転的に混淆した挑発的な絵画に「日本人が残したもの」へのシンボリックなアイロニーに満ちた姿がとらえられる。けだし日本人研究者からは見えにくい視点であろう。